

講師のご紹介



瀬口 哲夫 先生
 (名古屋市立大学名誉教授・工学博士)

専門
 歴史的遺産を活用したまちづくり
 近代建築史

経歴
 豊橋技術科学大学建設工学系助教授、名古屋市立大学芸術工学部教授を経て、平成 23 年 4 月より名古屋市立大学名誉教授。現在、刈谷市都市計画審議会会長、名古屋市歴史的風致維持向上計画協議会会長、名古屋城全体整備計画検討会議座長、岡崎城跡整備基本計画検討委員会委員長など。



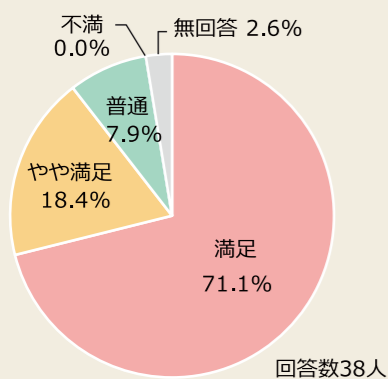
かりや景観れぽーと

今回の景観れぽーとは、平成 30 年 10 月に実施した「かりや景観づくり講座」についてご紹介します。今年度は、「城下町のまちづくり」をテーマとし、当日は名古屋市立大学名誉教授の瀬口先生の景観講座を受講した後、城下町の風情を感じられるまちづくりとは何かを考えながら、新たな視点で「刈谷城下町」を歩きました。また、景観まちづくりの取組みを参考とするため、岐阜県恵那市「岩村町本通り」を訪れ、景観まちあるきを実施しました。

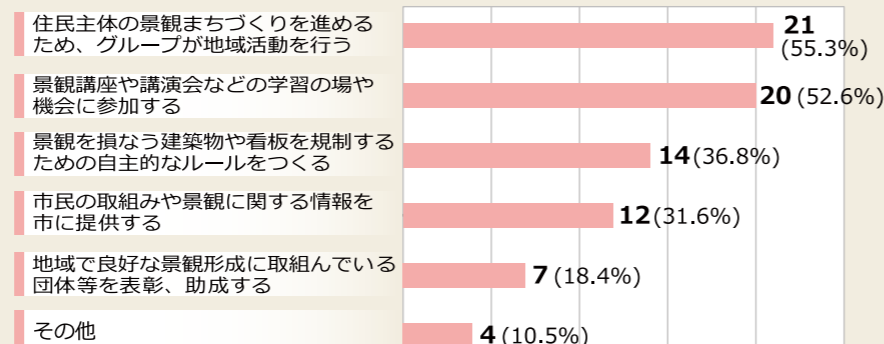
かりや景観づくり講座への参加者の声

かりや景観づくり講座終了後、参加者の方にアンケートのご協力をいただきました。ここではその結果の一部をご紹介します。

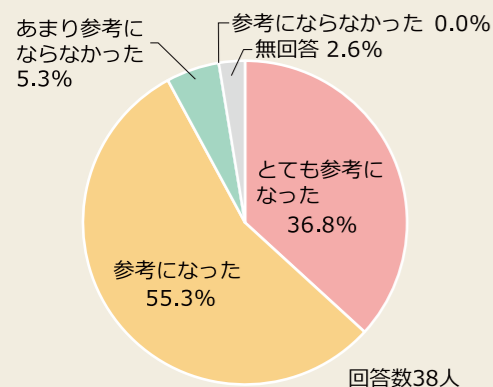
Q1 講座の内容はいかがでしたか？



Q3 市民が主体的になって景観まちづくりを進めていくにはどのようなことに取り組むことが効果的だと思いますか？



Q2 今後の景観づくりの参考になることはありましたか？



Q4 参考になったことやご意見をお聞かせください。

- ・刈谷の古い町並みが保存できていないことを知り、何を「見える化」するべきか考えたいです。
- ・刈谷城下町や刈谷城の「見える化」がとても必要だと思います。
- ・岩村町は伝統的な建物を修理し保存しているので、刈谷も古い建物を残し、まちおこしに役立てるとよいと思いました。
- ・岩村町は暮らしに関わる建物が制限されていますが、住民皆で協力し、町並み保全に力を入れていることが分かりました。

恵那市 岩村町本通り

八百年余りの歴史を持つ三万石の城下町として、岩村城跡をはじめ、重要伝統的建造物群保存地区に選定された古い町並みや旧跡が数多く残る女城主の里。



刈谷城下町での景観まちあるきも実施しました。

かりや景観づくり講座

市民の皆さんに景観形成に対する意識をより高めてもらい、みなさんの手による景観まちづくりや、良好な景観の形成につながる機会としていただくことを目的に、平成 15 年から毎年実施しています。



岐阜県東濃地方の政治、文化、経済の中心として栄えた商家町です。本通りと呼ばれる東西約1.3kmの道路の両側には、江戸時代からの町家が並び、枳形を境に東側は岩村城下町の町人地としての特徴を、西側は岩村電気軌道の開設等に伴う近代の発展過程を良く伝えています。各家の敷地には天正疎水と呼ばれる水路が流れ、周囲は山々で囲まれ、水や緑と一体となった特徴的な町並みを形成しており、約240世帯が居住されています。

景観を守るしくみ

国の重要伝統的建造物群保存地区内の建物が「文化財」という国民の財産でもある側面を併せ持っていることから、後世にわたり、末永く存続させるため、まちなみ保存事業を国の協力で行っています。主に家屋の外観を対象に、古写真などを参考に痕跡調査を行い、昔の家はどのような扉や窓だったのかなどを検証して、復元や修理を行うことで、昔の人が闊歩した往時の岩村の様子を再現する目的で行われています。

個々の建物のわずかな変化が、岩村町本通りの町並み全体を大きく変えてしまうことにつながるため、保存地区で行われる全ての建築行為については、市の許可が必要となります。

【まちなみ保存事業の例】



※昭和戦前以前の伝統的建造物に対して行う工事を「修理」、その他の建造物に対して行う工事を「修景」と呼んでいます。

住民主体のまちづくり



織田信長の叔母おつやが女城主であったことから、通り沿いの軒下には、女将の名前が入った暖簾や、佐藤一斎の「言志四録」の木版が掲げられています。住民みなで岩村の魅力を発信し、まち全体で関わっています。



伝統的な建物の修理・修景事業に建築士として技術支援を行うNPO法人「いわむらでんでんけん」の松山さんから説明していただきました。



町並みや市指定文化財の建造物を岩村町観光ガイドさんに案内していただきました。

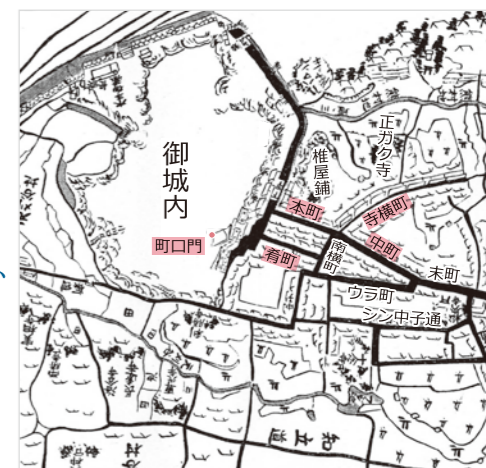
景観講座 講師：瀬口哲夫先生（名古屋市立大学名誉教授）

「消えた城下町の『見える化』と刈谷の町家の特徴」

【刈谷城下町はどこなのか】

「刈谷城下町」と言うが、どこが城下町なのでしょう。刈谷は戦災を受けていないにもかかわらず、城下町に古い町家があまり見当たらないのが不思議です。文化年間の「刈谷町絵図」という昔の図（右図）や、昭和28年の刈谷市街図をみると、本町や中町といった町名が表示されています。銀座5丁目には、町口門という碑があります。町口門の北は本町、東は肴町でした。しかし、現在は町名が変わってしまい、わからない市民が多いと思います。町名が変わったので、城下町に関する市民の記憶が薄れてしまいました。

「札の辻」（現在の銀座4丁目辺り）は、町人地の本町と寺横町が交差する場所であり、人々の往来が激しい刈谷城下町の中心でした。20～30年前は「札の辻」を地元住民でも知らない人が多かったようですが、現在はきちんと標識（三菱UFJ銀行刈谷支店前）を立て、その存在がわかるようになりました。



「刈谷町絵図」
（刈谷市誌 P.317 を基に編集）

【刈谷城下町の町家建築について】

明治時代前期の商家形態を知る手掛かりとして、表屋加藤新右衛門家の絵が残されています。1階は格子戸や店土間があり、奥に商品棚などが見えます。砂糖類、紙、茶商で、屋根に瓦が使われていることから裕福であったことが想像できます。瓦葺き、切妻屋根の2階建てで、2階窓にも格子が入っています。さらに、1階と2階の壁の位置が同じで、これが刈谷の町家の特徴と考えられます。現在では、道路拡幅された中町には古い町家が残っていませんが、肴町や本町には蔵や古い町家が少し残っています。

肴町にある旧市川呉服店の2階は、柱型を見せた白い塗籠で、刈谷の町家の特徴を備えています。他の町家も同様です。旧市川呉服店の軒先瓦や用水甕には家紋が入っており、「市力輪」と読めます。しかし、鬼瓦の家紋は、鷹の羽車紋（井上鷹）です。このことから市川氏が商売を始めた明治初年に、建物を居抜きで購入したという話が裏付けられます。



表屋 加藤新右衛門（城下町の商家）
（刈谷市史第2巻 P.485 より引用）



旧市川呉服店の鬼瓦の八つ鷹の羽車紋

【消えた刈谷の城下町】

城下町の町名から当時のまちの特徴を知ることができるので、通称でも良いから旧町名を明示するとともに、肴町等の刈谷の町家の特徴を持つ歴史的建造物を保全し、城下町であったことを「見える化」することが望ましいと考えます。



旧市川呉服店の用水甕の家紋と町口門跡の石碑

刈谷城下町

景観まちあるき

刈谷ふるさとガイドボランティアさんに案内していただき、新たな視点で「刈谷城下町」を歩きました。



旧肴町の旧市川呉服店前



郷土資料館（旧亀城小学校校舎）
国の登録有形文化財 設計：大中肇



亀城公園（刈谷城跡）十朋亭（本丸跡）